

NEXT GENERATION

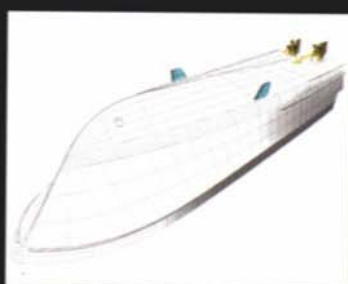
台湾

ALEXANDER MARINE
 HORIZON YACHT
 PRESIDENT MARINE
 TANIA YACHT
 VISION YACHT
 VITECH MARINE

撮影、文 大場健太郎
 Written & Photographed by Kentaro Oba

次世代を担う、アジア最大のボート生産国

台湾のボート産業はアジアからメガヨットの誕生を実現し、世界的評価と名声を手に入れた。海で遊ぶことを禁じてきた台湾が、なぜここまでの成功を収めたのか？日本でも馴染みの深いビルダーを訪ねて、世界のトップオーナーが注目するアジア最大のボート生産国へ飛んだ。



トラディショナルな モーターヨットの老舗

台南県の官田工業団地にあるプレジデントマリン社は、イギリスにマリーナを経営しているデリック・ホルトというスコットランド人と合併で始めた経緯を持ち、台湾でも古参の造船所のひとつだ。昭和7年生まれのエディー・ヨウ社長は大の日本びいきで、某メーカーのOEMを手がけるなど、日本ボート業界とのかかわりも深い。

最初のモデルはイギリス向けの41フィートのクラシカルなトロロータイプだった。その後アメリカ市場を舞台に時代と共に大きくモダンに進化しているが、今でも木工技術の美しいトラディショナルなボート造りを得意としている。建造実績も豊富で20フィートクラスから最大130フィートまで1千艇以上多岐種に渡る。またボートだけでなくセールヨットの建造経験を生かし優れた木工技術でも定評がある。会社の理念はオーナーの人生の時間を無駄にしない満足度の高いボート造りと、楽しむハッピービジネスを信条としている。

●問い合わせ先 ボートサイドTEL:045-849-2051



水槽でエンジンテストやコントロールテストを行い、その後シートライアルをしてアメリカのシアトルに輸出される76フィート豪華モーターヨット「レジェンド76」。



アメリカのボート雑誌の表紙を飾ったプレジデント830モーターヨットもかなり高い評価を得ている。

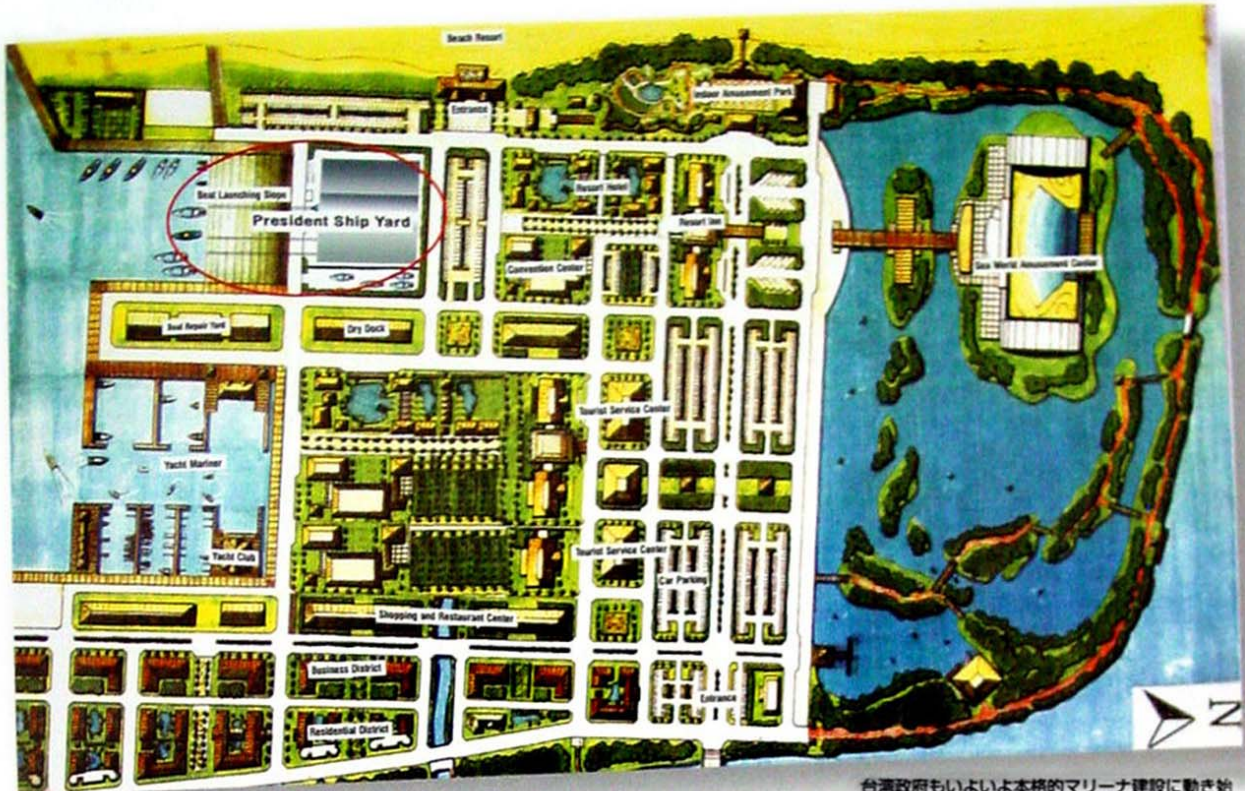


細かい仕様について、担当デザイナーと打ち合わせをするヨウ社長。設計セクションでも造船学専攻の優秀な人材を登用している。



大理石工場の経営から造船事業に転身して成功した台湾造船業界の重臣的立場のエディー・ヨウ社長。

台湾ボートの実状を探る



台湾政府もいよいよ本格的マリナー建設に動き始めた。全国に40箇所のマリナー計画があり、全てが公共マリナーとして国民に開放される予定だ。

世界での評価が高い台湾ボートの実状を探るために高雄にあるビテック、ホライズン、プレジデント、オーシャンアレキサンダー、ビジョンヨット、タニアの造船所を訪れた。

各社とも大型のモータークルーザーやスポーツフィッシャーマンを建造しており、いずれも日本ではほとんど見ることも出来ない豪華で高価なボートばかりである。

台湾は海に対して規制の厳しい国で、国民が海で遊ぶことを禁じて来たのに、プレジャーボートが数多く造られ、産業として成り立っているから不思議だ。

台湾でプレジャーボートが造られるようになったのは戦後駐留したアメリカ兵の影響で、この辺りは日本と似ている。しかし台湾と日本の決定的な違いは、自国で使用できないボート産業を儲かるビジネスとして捕らえたところだ。

バブル期には小さな国土に78社の造船所が乱立し“品質よりは数で勝負”のビジネスを強引に展開していたところが多く、これが日本でも台湾ボートの評価を低くしてしまった。バブル崩壊後は淘汰が始まり、現在は15社の造船所が世界のマーケットで健全に競っている。



アレキサンダー社ではアメリカ市場の販売戦略のために、シアトルに大型のマリナー投資も行っている。この投資は自社製品のセールスと保守点検、補修サービスに大きく貢献して、アメリカでの販売基盤を築いている。

世界戦略のマーケティングに勝ち残るために最新テクノロジーの導入や積極的な販売戦略を立て、ニーズを正確に分析して有利な立場で勝負したことが最も重要な勝因だ。

元来、世界の目が台湾に向けたのは安い労働力による低コストの有利さだ。しかし今では台湾のコストも上がり、有利とは言えない。台湾ボートがコスト競争に勝つために注目したのが、利益率の高い大型で豪華なカスタムボートへ生産を移行である。それにしても日本ではお目にかかれないドリームボートが世界でこんなに利用されているとは目から鱗であった。

すぐ隣の台湾が成功しているのに、日本のボート業界は次々に押し寄せる高波を避けるため岩陰で耐えるしかない。「日本の技術は世界に誇れるがコストが高すぎる」という言い訳はもはや通用しない。日本では、バブル期に高額のボートを欲しがり、高い保管料を払って表面だけのマリン文化を享受してきた。ボートを提供していた業界も国内需要に錯覚し、贅沢で豪華なボートは輸入に頼ってただ提供していた。ここでも土地神話と同じように終わりのない夢に踊らされ、浮かれていたに過ぎない。

業界だけでなく政府も含めて、真のボート産業の活性化は自国だけでなく、世界をマーケットにしなければいけない。マリン文化も含めて逆輸入しなければ日本のマリン環境の未来は見えてこないという事を台湾のボート産業が教えてくれた。

NEXT
GENERATION
台湾